

塔本シスコ《絵を描く私》1993年

塔本シスコ展 Tomoto Shisuko's Paradise I Can't Help But Paint : A picture Diary of My Life

シスコ・パラダイス

かかずにはいられない!人生絵日記

2022年2月5日(土)~4月10日(日)

平素から、当館の展覧会活動に対して、ご理解ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

このたび熊本市現代美術館では、「塔本シスコ展 シスコ・パラダイス かかずにはいられない! 人生絵日記 | を開催いたします。熊本県出身の素朴派の画家・塔本シスコ。50 代で油絵を始め、91 歳で亡くなるまでの 40 年間に膨大な数の作品を描きました。あふれでる夢や喜びを制作の原点としたシスコ・ワールドの全貌をご紹 介します。本展は、2021 年 9 月に世田谷美術館を皮切りに、2022 年 2 月に熊本市現代美術館、岐阜県美術 館、滋賀県立美術館を巡回する、これまでで最大規模の塔本シスコの回顧展です。

ご多忙の折とは存じますが、同展についてご紹介いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

|開催概要

展覧会名: 塔本シスコ展 シスコ・パラダイス かかずにはいられない! 人生絵日記

期:2022年2月5日(土)~4月10日(日)(56日間)

会 場:熊本市現代美術館 ギャラリーI・II

間:10:00~20:00 (展覧会入場は19:30まで) 時

休 館 日:火曜日

催:熊本市現代美術館(熊本市、公益財団法人熊本市美術文化振興財団)、 主

熊本日日新聞社、熊本放送

助 成:美術館連絡協議会

後 援:熊本県、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本県文化協会、熊本県美術家連盟、

熊本国際観光コンベンション協会、J:COM、エフエム熊本、FM791

観覧料:

	当日券	前売券 *1/団体割引 *2
一般	1,100 円	900 円
シニア(65 歳以上)	900 円	700 円
学 生(高校生以上)	600 円	500 円
中学生以下	無料	

- *1 前売券は2月4日(金)まで販売
- *2 団体割引料金は以下の場合に適用

20 名以上の団体/美術館友の会証、各種障害者手帳(身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手 帳、被爆者健康手帳等、付き添いの方1名も適用)、電車・バス1日乗車券等、JAF 会員証、緑のじゅうた んサポーター証をご提示の方

【チケット取扱い】

熊本市現代美術館、ローソンチケット"ローチケ"「Lコード:82308]、 セブンチケット「セブンコード:092-351]

新型コロナウイルス感染拡大防止について

- ・新型コロナウイルス感染症拡大の状況によっては、展覧会や関連イベントの中止、開催内容の変更、 入場制限等を行う場合があります。詳細と最新情報については当館ホームページまたは SNS をご確 認ください。
- ・入館に際してはマスクの着用、手洗い励行、手指の消毒などにご協力ください。
- ・入館時に検温とチェックシートの記入(氏名・電話番号)をお願いします。

|塔本シスコ Tomoto Shisuko



塔本シスコは、1913 (大正2) 年、現在の熊本県八代市に生まれ宇城市 で育ちます。養父の傳八は、自身のサンフランシスコ行きの夢を託し、 長女である彼女をシスコと命名しました。1933年、20歳の時に塔本末 藏と結婚し、ウサギやチャボなどを飼い、愛育しました。その後、一男 一女を得て、子どもたちと一緒にスケッチをしたり、スズムシ、金魚な どを飼う日々を過ごします。1959年に夫が急逝し、しばらくは体調不 良のために静養の日々が続きました。1961年、48歳の時には脳溢血に 倒れ、このリハビリテーションのために、石を彫りはじめ、1966年、

53 歳のある日から、大きなキャンバスに油絵を描き始めます。身のまわりの植物、愛育している金魚などを モティーフとして、絵画表現の既成概念にとらわれない、世界を創り始めます。1970年には、長男で画家の 賢一と同居するために、大阪に移住しますが、制作はますます旺盛さを増します。シスコの絵画世界は、何も のにもとらわれない、彼女の胸中に宿る喜びや夢があふれ出てくるもので、時空を飛び越え、しばしば、子ど もの頃の想い出もモティーフとなって現れ、身近な親族や、散歩でよく会う名もしらぬ人までが登場してきま す。2001年には貧血で倒れたことをきっかけに、認知症を発症しますが、「私は死ぬまで絵ば描きましょうた い」と、亡くなる前年の2004年まで制作は続きました。生涯にわたって、少女のような純粋さを保ち、自身 の喜びと夢を制作の源泉にしていた塔本シスコは、2005(平成17)年に91歳の人生をとじました。

|展覧会構成

第1章 「私も大きな絵ば描きたかった」パラダイスへの第一歩

塔本シスコさんは 1913 年、八代海にほど近い熊本県八代郡群築村(現・八代市郡築)に生 まれました。"シスコ"の名は、養父が夢見ていたサンフランシスコ行きにちなんで名づけ られたといいます。生後間もなく、下益城郡松橋町(現・宇城市松橋町)で半農半漁を営 む裕福な農家、西﨑家の傳八、ワリ夫婦に引き取られた後、8歳まで祖父母(傳八の両親) に預けられましたが、あたたかな愛情を受けて、快活で絵を描くことの大好きな少女へと 育ちます。しかし、西﨑家の家業が傾いたため、尋常小学校を4年生で中退し、農業の手 伝いや奉公に出されるなど、労働の日々を送りました。1933年、シスコさんは20歳で塔 本末藏さんと結婚します。家事や子育てに励み、戦後は熊本市内で食堂を開いた末藏さん を支えつつ、自宅ではスズムシや金魚、チャボなどの小さな生き物たちを飼い、子ども達 と一緒に出かけてスケッチを楽しむ生活を過ごします。ところが、1959年、末藏さんが事 故で突然亡くなってしまいます。深く悲しみ、心労を募らせた結果、1961年に軽い脳溢血 で倒れますが、石を彫った作品を作るなど、リハビリテーションに取り組み、次第に体調 を回復させていきました。1966年、画家を目指していた息子の賢一さんが家を出て働き始 めると、シスコさんは賢一さんが家にのこした作品の油絵具を包丁で削り落とし、その上 から自分の作品を描き始めます。《夕食後》は、その独特な空間把握を示す作品で、娘の和 子さんとそのパートナーを題材としています。《秋の庭》も、この時描かれた作品です。夏 の盆休みに帰省した賢一さんに、シスコさんは、「私も大きな絵ば描きたかった」と、秘め ていた強い思いを伝えました。この言葉と描かれた作品に心を打たれ賢一さんは、その制 作の後押しをしようと決意します。こうして、53歳にして絵を描く生活が始まりました。 シスコさんは、心の内に広がるパラダイスを描き出す最初の一歩を踏み出したのです。



《夕食後》1967年



《秋の庭》1967年

第2章 「どがんねぇ、よかでしょうが」熊本から大阪へ

2-1 | 「ちょっとみてくれんね」/団地の4畳半はシスコのアトリエ

2-2 | 「シスコの絵を見て下さいませ」/ちょっとおでかけ、山田池公園

1970年の夏、シスコさんは、息子の賢一さんと同居するため、京都と大阪の中間地点、大阪府 枚方市の一軒家に引っ越します。庭の周りにひまわりを育て自ら作り出した景色に、故郷の田植 風景を重ね、異なる時間と空間が一つの画面に溶け合った《長尾の田植風景》が公募展で入賞し、 絵を描くことへの自信を得ます。賢一さんの結婚に伴い、同市内の団地に移ってからは、4 畳半 の自室をアトリエとして、家族で訪れた行楽地を、まるで絵日記のように次々と描いていきます。 「ちょっとみてくれんね」と家族に意見を求め、大きな絵は戸外に持ち出し、団地の壁をイーゼ ル代わりに仕上げました。小柄なシスコさんは絵を回しながら描き、縦横も自由。《野外彫刻展 を見に行く》の裏には、「どちらを上にしてもよかです」と書き込まれています。熊本時代には どこか抒情性を帯びていた画風が、70代に入り、多彩で奔放な構成となり、盛った絵具が凹凸 を呈し、ちょっと奇妙で愛しい"シスコ・ワールド"が開花していきます。《造幣局の桜》他で、緑 草花樹にウサギや小鳥がとまり、園児が並んでいるのは、弾んだ気持ちや幸福感の表れです。そ の中でシスコさんの絵に惹きつけられた人たちによって、作品を発表する機会が広がります。展 覧会を目標に描き、展覧会で人に褒められ、訪れた人に「どぎゃんねぇ、よかでしょうが」と気 さくに話しかけるシスコさんは、80歳代に入ってさらに旺盛な制作を重ねました。しかし、順 風満帆なばかりではありません。1996年には娘・和子さんが病死します。それは、人生最大の 悲しみとなりました。気持ちが沈み、暗い部屋でずっと横になっているシスコさんを、賢一さん は「コスモスを見に行かんね」と連れ出します。それは《枚方総合体育館前のコスモス畑》の制 作へと繋がり、描くことによって気力を取り戻していきました。日常のなかのハレの場、近所の 山田池公園は、十数年にわたり、驚きや幸せをつめこんだ創作のパラダイスであり続けました。 シスコさんのマジカルな創造力は、ごくふつうの公園を舞台に果てしなく涌き出るのでした。



《長尾の田楠園景》1971 年



《野外彫刻展を見に行く》1995年



《造幣局の桜》1987年



《枚方総合体育館前のコスモス畑》1996年

「ムツゴロウが潮に乗って跳んでさるく」 ふるさとの思い出日記 第3章

第3章では、シスコさんのふるさとである熊本や九州の風景を描いた作品を紹介しています。 《桜島》は、棕櫚やレッドジンジャーなどの南国独特の植物や桜島の山肌を、丹念に絵の具を塗 り重ねて表し、火山灰を丸や三角などでグラフィカルに表す描写に、その個性が発揮されていま す。また、段ボールを連結させた巨大なパネルを作って描くことで、スケール感いっぱいに表す ようになっていったのも、この時期です。その一方で、シスコさんは、70歳を過ぎてから、熊 本で過ごした子ども時代を振り返って描いた一群の作品を残しています。《五色山の想い出》で や《ふるさとの海》などは、自身が見て、感じた大正から昭和初期の故郷の風景を、記憶を丹念 にたどりながら描いています。《五色山の想い出》で、「熊本県宇土ノ花園ノ五色山へ原先生と三 人で行き びっくりたまげた絵」と画面に説明を書きこむのはシスコさんの特徴の一つです。そ れは当時のことが忘れ去られていくなかで、状況が少しでも正確に伝わるようにと思ってのこと だったのかもしれません。もう一つ、特徴的なのが、着物姿のシスコさんとその姉妹が、二人の 孫と一緒に遊ぶ《古里の家 (シスコ、ミドリ、シユクコ、ミア、ケンサク)》のように、異なる 時代を一つの画面の中で表す試みです。手づくりの人形や、仲良く遊ぶ孫たちの姿が、記憶の扉 を開ける引き金となり、時間や空間を自在に超えたイメージを絵画の中で構築する、そのシスコ さんの表現の自由さに驚かされます。



《桜島》1970~1988年



《ふるさとの海》 1992年 能本市現代美術館蔵



---《五色山の思い出》1988年



古里の家(シスコ、ミドリ、シユクコ、ミア、ケンサク)1988年

第4章 「私にはこがん見えるったい」あふれるシスコ・パラダイス

- 4-1 | 「自分で植わったカボチャ」/シスコの庭
- 4-2 | 「アジサイの中であそびなさい」/シスコといきものたち
- 4-3 | 「ミーィはよか男」/シスコとネコ

シスコさんは結婚した頃から、暮らしのなかで、植物や小さな生き物を育ててきました。水や餌 をあたえ、日々、静かに大切な生命と向き合う姿は、その人柄をしのばせるものです。多くの作 品に共通して言えることですが、とりわけ植物を描いた作品では、明るく鮮明な色彩があふれて います。どの色もけして単調に塗られることなく、隣り合う色どうしが響き合う工夫が凝らされ ています。とりわけ、《春の庭》、《絵を描く私》、では、にごりのない鮮明な色彩をこまやかに埋 め尽くしていく特徴が、よく表れています。シスコさんが向き合うモティーフは、すべてシスコ さんが愛した生命でした。それゆえ、作品の隅々にまで丹念に筆を運び、作品はとても密度の高 い表現に満たされています。章のタイトル、「私にはこがん見えるったい」は、シスコさんの言葉 です。きっと、自分自身の眼で見て、感受したことにこもる輝きを信じていたのでしょう。けし て、借り物の表現ではない世界を、丹念に耕そうとする想いが感じられます。そして、好んで描 いたネコたちは、どれもこれもが可愛らしく、ユーモラスに感じられます。しかし、ただ単にネ コを可愛く描こうとしたわけではありません。ネコはシスコさんの家では、大切な家族の一員で した。それは飼猫だけではなく、近所の野良猫たちも、大切な話し相手であり、親しい隣人でし た。そのため《ネコ》、《3 匹のネコ》、などは、あたかも家族を撮ったスナップ・ショットのよう な愛情に満ちた作品に仕上がっているのです。シスコさんが身近な植物や生き物に心を向け、そ れぞれが宿す生命感を深く見つめ、描きだそうとすることで、シスコ・パラダイスは、とめどな くあふれ、広がっていきました。





《絵を描く私》1993年





《三匹のネコ》1996年

「また新しかキャンバスを持って来てはいよ」とまらないシスコ・ワールド 第5章

- 5-1 | 「バックには好きな花を描くけん。なんの花がよかね」/シスコの家族
- 5-2 | 「シスコのパアテイデスヨ| / にぎやかなこと、ありがとう

シスコさんにとって、家族は重要なモティーフであり続けました。団地でシスコさんがともに暮 らす息子夫婦と孫二人を、それぞれ肖像画に描くことにした時は、「バックには好きな花を描くけ ん。なんの花がよかね」と聞いてまわり、各自の好きな花とともに作品にしました。《88 才のプレ ゼント》のように、家族からもらったものも嬉しい気持ちで絵に描いています。《もらったラン、 もらったシクラメン》の中の遺影の夫も大切な家族であり、家に遊びにくるネコたちにも愛情の まなざしをそそぎました。シスコさんは、自分の作品を見に来てくれる人を歓迎し、その出会い を大切にしました。自身が注目される晴れ舞台でもある展覧会など、楽しいこと、にぎやかなこ とが大好きでした。近所の人にたちに囲まれながらテレビの取材を受ける様子を描いた《NHK が やって来た》には「シスコのおまつり」と裏書きされ、シスコさんの高揚感が伝わってきます。 自分の人生の出来事だけでなく、その時々の世間のニュースを描き込むことも、いくつかの作品 に見られる特徴の一つです。生活の中でテレビをよくつけていたシスコさんは、例えば《さよう なら長野オリンピック》で、オリンピックを報道するテレビが画中画のようになっているように、 目に入ってくるニュースを作品に取り入れています。80代になっても制作意欲は衰えず、シスコ さんは家族に「また新しかキャンバスを持って来てはいよ」と言っては、作品を描き続けたので した。







《NHK がやって来た》1995年

第6章 「私は死ぬるまで絵ば描きましょうたい」シスコの月

水甕を抱え顔が3つある女性像は、石の彫刻に始まるシスコさんの創作の原点です。《シスコの女 神》や陶人形などで最晩年まで繰り返されたモティーフで、その豊穣な創造力を物語る造形だと 言えます。88歳の夏、シスコさんは貧血で倒れ認知症を発症します。そうしたなかでも創作のエ ネルギーが衰えることはありませんでした。モティーフは、居室で座って描ける見舞いの花や果 物に移り、扱いやすい画材や小品へと新たな展開をみせます。花や鳥を並べた愛らしい装飾性が 表れるのもこの頃です。柑橘系の果物はたいてい九州の親類からの贈りもの。ザボンの果皮の粒々 の(油胞)を、シスコさんらしい工夫で、チューブから直接しぼり出して表現しています。また、 点や線で画面を埋め、ペンを併用するなど、年齢を重ね体力が続かない中での工夫や、補色で何パ ターンも描くなど、感覚の変化に伴う色・形・筆致のリズムによって、濃縮した"シスコ・ワール ド"が現れてきます。作品の発する力強さは、若さや体力によるものではなく、内面に蓄えられた 制作への情熱であることに心を打たれます。最晩年、シスコさんは不思議な絵を描きます。幼児が 発達段階の過程で描く"頭足人"を思わせる、頭と手だけの村人達が集った《フレ川綱引き》は、プ リミテイヴな熱気を放っています。ものを見て描くのではなく、心にとどめてきたイメージを表 出させた真骨頂を示す一点です。シスコさんは、初期から不思議と「月」、それも煌々たる満月を 描き続けました。欠けてはまた満ちる月に、無意識に人生を投影し、あるいは母への思いも重ねて いたのでしょうか。絶筆は力強く輝く満月でした。それは、何ものにも媚びずに生きた、シスコさ んの生命の煌めきかもしれません。



《シスコの女神》1961 年頃



《晩白柚八代、ぽんかんのべおか》 2002 年



《フレ川綱引き》2003年



《シスコの月》2004年

第7章 「シスコは絵をかく事シかデキナイのデ困った物です」かかずにはいられない!

- 7-1|「もったいなか」/全てがたからもの
- 7-2|「シスコはネンドヲツクリましたよう」/楽園の住人たち
- 7-3 | 「シスコの晴姿」/手描きの着物

シスコさんの制作は、平面の世界にとどまるものではありませんでした。「描きたい」という衝動 は、どんなところにも広がっていきました。たとえば、素麺が収められていた木箱、竹筒、木製の 引き出し、お酒の空き瓶、しゃもじにまで絵を描きました。きっと、シスコさんの眼には、身のま わりのすべてが、素敵なキャンバスに見えたのでしょう。そして、箱でも瓶でもしゃもじでも、そ れぞれの形状に合わせて構図を考え、三次元ならではの小さな宇宙が、そこには誕生しています、 これらの作品は、創造のために働かせる空間を捉える知覚が、平面と立体という形の違いを悠々 とのり越えていったことを物語っています。さらに、シスコさんは作陶にまで手を広げ、《鳥の精》、 《鳥の女神》といった一連の作品をのこしています。これらの作品には、ある種の神秘性が宿って います。それは自然への崇拝であり、鎮魂の想いなどであり、平面の作品にはないシンボリックな イメージが託されているように感じられます。また、若い頃に習得した和裁の技術を活かして、和 装の小さな人形もたくさんつくっています。江戸時代の町人を思わせる人形たちは、しばしば、絵 のなかにも登場します。絵のなかの人形も、手づくりされた人形も、楽しい記憶や浮き立つ心を描 きだすための、かけがえのない存在です。シスコさんだけにわかる、それぞれの個性が人形たちの 表情ににじみだしています。そして、絵柄を手描きした着物は、まさに《シスコの晴着》の通り、 自分自身を着飾るために描き込んだものです。襟元から裾の先まで、そのお洒落心が満ちあふれ ています。



《庭の菊の花》(素麺の箱)1997年



《月》(左)、《太陽》(中)、《烏(青)》(右) (しゃもじ制作年不詳)





《鳥の精》1990年 (左)



《椿》(手描きの胴巻と太鼓)1988 年頃

|関連イベント

■【第1部】オープニング・トーク

ゲスト:福迫弥麻(シスコの孫)、いしいしんじ(作家)

日時:2月5日14:00~15:00

定員:50名 要事前申込・先着順 無料

■【第2部】シスコ de ディスコ

いしいしんじさんがシスコと聴きたいベスト 10 を選曲し、蓄音機で演奏します。

日時:2月5日15:30~16:30

定員:50名 要事前申込・先着順 無料

その他鑑賞ツアーや、レクチャーカレッジなどの関連イベントは、 当館ホームページ、SNS でお知らせします。

シスコの裏側美術館 開催中!!

シスコさんの作品の「裏側」をホームページで公開しています。 ぜひお立ち寄りください。



|巡回情報

本展は下記の日程で各会場を巡回いたします。

会期	会場
2021年9月 4日(土)~11月7日(日) [終了]	世田谷美術館
2022年2月 5日(土)~4月10日(日)	熊本市現代美術館
2022年4月23日(土)~6月26日(日)	岐阜県美術館
2022年7月 9日(土)~9月 4日(日)	滋賀県立美術館

|記者発表| 2022年2月4日(金)13:30~

※一般公開 – 2月5日(土) 10:00~

■タイムスケジュール

13:00 受付開始

13:30 記者発表、内覧会開始

- ・会場案内(担当学芸員によるツアー形式/30分)
- ・個別取材・撮影タイム (60分)

15:00 会場クローズ

■注意事項

- * 作品保護のため、館内では鉛筆をご利用ください。お持ちでない方には貸出をいたします。 (ボールペン・シャープペンシルのご使用はお控えください。インク、先のとがったものによる作品の破損を防ぐため です。ご理解・ご協力のほど、よろしくお願いいたします)
- * 作品保護のため、お手回り品(リュック等)が壁や作品に触れないよう、ご注意をお願いいたします。 (会場でご使用にならないお荷物はコインロッカーをご利用いただくか、お預かりも出来ますのでお声がけください)
- * ご参加予定の方は事前にご一報いただけますと幸いです。
- * 受付にてお名刺を1枚頂戴いたします。お持ちでない場合は芳名帳へのご記入をお願いします。
- * 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、美術館入口にて検温、手指の消毒にご協力をお願い しております。

お問い合わせ先

熊本市現代美術館 (広報担当:手嶋彩香 学芸担当:坂本顕子)

TEL: 096-278-7500 FAX: 096-359-7892 〒860-0845 熊本市中央区上通町 2-3

HP: www.camk.jp E-mail: gamadas@camk.or.jp



・美術館入口(びぶれす熊日会館3階)まで、通町筋電停 又はバス停から徒歩1分です。電車通り側歩道から、 エスカレーター又はエレベーターをご利用ください。

A 7 0 D

・「びぶれす熊日会館」の駐車場(有料)は、数に限りがあります。 できるだけ公共交通機関をご利用ください。

| 広報用画像について

広報用画像をご用意しております。

下記内容をメールでお知らせください。広報担当からご連絡致します。

① 掲載媒体 / ② 希望画像 No. / ③ ご担当者様のお名前、ご連絡先(メールアドレス等)

使用に際しての注意事項

画像のご使用にあたっては、以下の点にご留意お願いいたします。

- ・使用目的は、本展のご紹介に限ります。本展終了後の使用は出来ません。ご使用後は(掲 載、未掲載に関わらず)画像データを削除してください。第三者への譲渡は禁止します。
- ・作品キャプション・クレジットを明記してください。
- ・トリミング、部分使用、文字等を重ねての使用はできません。
- ・WEB 媒体でご使用の際は、ダウンロードブロックなど、コピー防止の処理をお願いします。
- ・掲載紙・誌、同録 DVD 等を一部寄贈してください。 (WEB 媒体の場合は掲載 URL をお知らせください)

原稿が出来上がりましたら広報担当までお送りください。

速やかなお戻しを心がけておりますが、確認に3~5日程かかる場合がございます。ご了承ください。

